原案：永瀬正敏　主題歌：PANTA　脚本・監督：井上淳一

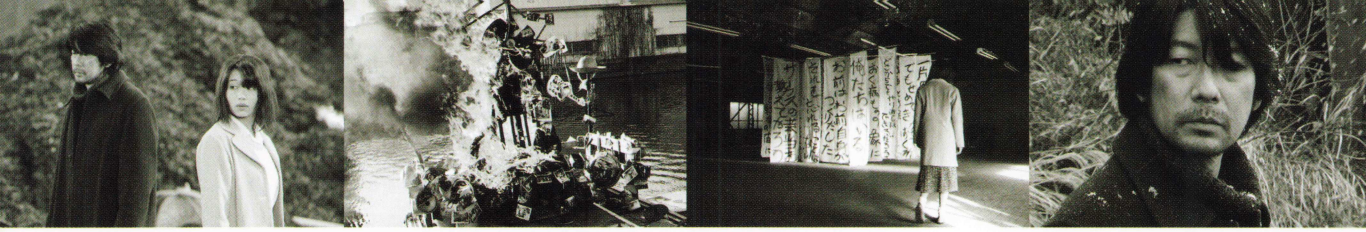
世界は
ガラクタの中に横たわる

永瀬正敏　ミズモトカナコ

いきものがたり

主題歌：「時代はサーカスの象にのって」（作詞：寺山修司 高取英／作曲：PANTA）

企画プロデュース：木全純治　プロデューサー：片嶋一貴　撮影：鍋島淳裕　照明：堀口健　美術：永澤こうじ　音響デザイン：臼井勝
編集：細野優理子　監督補・特撮監督：石井良和　製作主任：長谷川和彦　宣伝デザイン：大石理紗子　写真：永瀬正敏　村上一成
製作：シネマスコーレ　ドッグシュガー　配給：ドッグシュガー　2014／日本／モノクロ／DCP／5.1ch／ビスタ／47分



原案 永瀬正敏が贈る“喪失と再生の物語”

『戦争と一人の女』の舞台挨拶で監督の井上淳一とシネマスコーレを訪れた永瀬正敏は、支配人の木全純治よりとある企画の監督依頼を受ける。それは名古屋市内を流れる中川運河という今はもう使われていない運河を舞台とした短篇映画だった。奇しくも中川運河は名作『泥の河』の舞台でもあった。永瀬は「出演はするが、監督は井上さんで」と言い、永瀬主演×井上監督での製作がその場で決定した。すぐに訪れたロケハンで、永瀬は映画の舞台となる鉄屑工場と出会い、シャッターを切りまくる。その二日後、井上のもとに永瀬から一本のプロットが届く。それは、誰もいない街の廃工場でひとり筏を作り続ける男の話だった。そこにひとりの女が訪れる——

井上は永瀬のプロットに、東日本大震災後のイメージをプラスし、脚本を執筆。原発事故後の誰もいなくなった世界に取り残されたような男と女の話を作り上げた。そして、黒澤明の隠れた名作『生きものの記録』と同じタイトルをつける。『生きものの記録』は度重なる原爆実験による放射能の恐怖に怯えた三船敏郎がひとり孤独に狂っていく話だ。井上は「黒澤は狂っているのは三船か、何も感じないお前らか、と観客に問うている。この映画は三船のその後の話だ」と同タイトルをつけた理由を語っている。また、後年、『箱男』を観た井上は「これは、『箱男』を作れなかった時代の、永瀬正敏による『箱男』ではないか」とも述べている。果たして、その真意は——

女を演じるのは、『福田村事件』のミズモトカナコ。当時、まだ京都芸術大学の学生だったミズモトは永瀬相手に一歩も引けを取らない堂々たる演技を見せている。撮影は、『極悪女王』の鍋島淳裕。過去とも未来ともつかない世紀末的風景をモノクロ映像で見事に捉えている。プロデュースは木全純治。これは『青春ジャック 止められるか、俺たちを2』コンビの初タッグでもある。そして主題歌は、2023年に亡くなった「頭脳警察」のPANTA。寺山修司と高取英による詩にPANTAが曲をつけた「時代はサーカスの象にのって」がせつなく流れる。

本作は2013年に撮影。当時は47分の短篇を上映する環境になく、翌14年にシネマスコーレのみで公開。しかし、近年、『ルックバック』や黒沢清の『Chime』などのヒットにより状況が変化。24年、井上の師である若松孝二13回忌イベントで上映。そこでの絶讃を受け、ついに全国公開となる。幻の傑作が今ここに蘇る。

「瓦礫、瓦礫って言うけど、
みんな、生活の一部だったんだ」

3月7日㊎より テアトル新宿ほか全国順次ロードショー

特別料金 1,300円(税込)均一